

神奈川県現代俳句協会会報

第170号

令和7年12月発行

令和七年度（第四十二回）

神奈川県現代俳句協会俳句大会報告

龍潤記

令和七年十一月二十三日（日）
於…神奈川県民センター



芳賀陽子会長挨拶・ご来賓と入賞者の皆様

曇天ながら、それほど冷え込みを感じさせない中、第四十二回俳句大会は午後0時に総合同会佐藤久事務局長の発声で、定刻どおり開会された。なお、既に当日句会（兼題 神迎え・根）のための投句は終了している。開会の辞では、佐々木重満副会長が「一日存分に俳句を楽しんで欲しい」と述べられた。続いて、山下遊児実行委員長が「これからが本番、協力よろしくお願いします」と挨拶。更に、芳賀陽子会長は「今年は昭和百年。戦後八十年。いろいろ考えさせられたが、自由に俳句が出来る幸せを次代に語り継ぐことが使命。」と挨拶された。また、「今日も会場は暖房が無いが、星野高士先生の講演で身も熱くなるだろう」と予言して、会場の笑いを誘った。続いて、来賓の紹介と挨拶へ進んだ。

千葉県現代俳句協会会長の羽村美和子氏は戦争に触れて、新興俳句の弾圧の話に言及。「神奈川県協会の層の厚さを感じ、勉強させていただきたい」と述べた。続いて、東京都現代俳句協会会長山本敏倅氏、東京多摩地区現代俳句協会副会長石橋いろり氏、横浜俳話会会長川島由美子氏、神奈川県俳句連盟副会長川島浩平氏が次々に神奈川県協会の魅力や大会に対する祝意を述べられた。続いて、大会作品の成績発表となり、尾澤慧璃氏により受賞者が発表され、賞状賞品が授与された。第一位（十八点）は、「シャワー全開わたし丸ごと水中花」を詠んだ塚田佳都子氏、第二位（十五点）「エックス線白い所が枯野です」、作者関戸信



授賞式：保里よし枝さんと会長



星野高士先生

トピックス

第42回
俳句大会報告
諸家近詠
会員新刊案内
サミット短信
会員新刊案内
吟行しようよ！
丹沢吟行会報告
冬の一句



治氏、第三位（十五点）「蟬しぐれ耳笑うほど髪切つて」、作者保里よし枝氏と続いた（以下詳細は作品集参照ください）。塚田氏は生憎欠席で、なつはづき氏が代りに芳賀会長から賞状を受け取った。三十位迄表彰がされ、受賞者全員に大きな拍手が送られた。講評は、大本尚顧問、尾崎竹詩名誉会長、芳賀会長が自ら選んだ特選句を中心に、丁寧な鑑賞と分析を述べられた。

午後一時からは星野高士先生による「吟行の奥行き」の講演が開催された。なつはづき企画担当から、現代俳句協会の副会長に就任された星野先生のご紹介が行なわれ、これを受け「敬愛なるなつさんから過分な紹介」と軽やかに星野先生のトークが滑り出した。

要旨としては次のとおり。俳句は生きものであること、現代俳句協会に入会したのは、自分として必然であること、俳句甲子園の審査員としての思いなどを述べ、月二十五回の句会、月五、六回の吟行をこなしていることが披露された。そして吟行の落とし穴についてや日記になつてはいけない等々注意ポイントを挙げつつ、吟行はどんどんやるべきと結論付けられた。

後半は、虚子が吟行の先駆けとして行った武蔵野探勝会のスケールの大きさ、芭蕉の奥の細道の緻密さ、レジュメを使つての俳人たちの吟行における俳句の魅力を語り、講演の最後は会場からの質問にも答えられて、あつという間の一時間が終つた。

午後二時より当日句会の作品集が作成され、一人三句の選句がされた。そして、岩田信氏、米田規子氏、伊藤眠氏の三氏による披露がされ、出席会員はそれぞれ作品集に点盛り作業をしていった。

すべての披露が終り、集計作業がされる間に今年度の新人会員六人の紹介と各人の挨拶があつた。そして、星野高士先生を始め来賓の皆様、更に川村智香子氏、山田貴世氏、田畑ヒロ子氏から自身が選句された句に関して鑑賞と講評が述べられた。集計が終了し、担当した平田薫副会長が第一位から発表をし、表彰式はスタートした。（十三点）「戻りたる先は過疎村神迎え」、作者川島浩平氏が第二位の九点を大きく引き離して第一位となつた。その後も、表彰は結社賞提供の結社の紹介を経て、賞品のある限り続いた。閉会の言葉は内藤ちよみ副会長が充実した一日を過すことができた締めくくり、午後四時四十五分に大会は無事終了した。

【募集句入選作品】

- | | |
|-----------------|----------------|
| 神奈川県現代俳句協会賞 | 尾澤 慧璃 報 |
| シャワー全開わたし丸ごと水中花 | 塚田佳都子 |
| 神奈川県知事賞 | 関戸 信治 |
| エックス線白い所が枯野です | 関戸 信治 |
| 神奈川県議会議長賞 | 保里よし枝 |
| 蟬しぐれ耳笑うほど髪切つて | ※関戸 信治 |
| 手拍子のところで揃う盆踊 | 麻生 明 |
| 神奈川県教育委員会教育長賞 | 遠泳の最後の一人海を脱ぐ |
| tk賞 | 向日葵が立たされている小学校 |
| 横浜俳話会賞 | 合掌を解かぬ少年晩夏光 |
| 神奈川県俳句連盟賞 | 噴水の高さ平和へ届かない |
| 藤田 裕哉 | 竹村 半掃 |

入賞

- | | |
|------------------|--------|
| 秋麗や時刻表なきポンポン船 | 古宮ふるる |
| 古書市に昭和を探がす文化の日 | 大澤 秀子 |
| 八月や小鳥のこないしずかな木 | 平田 薫 |
| 家売つて百万本のねこじやらし | 関根 洋子 |
| 水中花彼は女として生きる | 山口 愛子 |
| 冬あたたか赤子見る人みな笑ふ | 堀場美知子 |
| どの路地も海へ繋がる星月夜 | 池田恵美子 |
| 梅干すや三千粒の深呼吸 | 須田 聡子 |
| 何にでもなれたあのころ赤とんぼ | 濱田 聡子 |
| あの頃に捨てた尾がある花野かな | 山本 敏倅 |
| フルートになれぬピッコロ小鳥来る | 山下 遊児 |
| 千年と云ふ神木の若葉風 | 和田 秀子 |
| 金魚ごめん僕から先に出てゆくよ | ※山下 遊児 |
| 夏休み一年十三組のころ | ※麻生 明 |
| 鬱の字の隙間通れず秋の風 | 近藤 久江 |
| ポンポンダリア相槌の欲しい午後 | なつはづき |
| 甚平が今の私のすべてです | 堀越 胡流 |
| 身の程に負ふ荷物あり蝸牛 | 桑原 光恵 |
| 西瓜切る家族は丸くなっている | 田畑ヒロ子 |
| 八月やみんなが水を飲みたがる | 栗林 浩 |
| もう張らぬ乳房よ烏瓜の花 | 鈴木 砂江 |
| 門の無き仮設住宅水を打つ | 堀場 信久 |
| 遺影みな少し笑つて鬨雲 | ※山口 愛子 |
| 青梅雨の森がゆさゆさ歩き出す | ※尾崎 竹詩 |
| しゃぼん玉影が迷子になつて | ※関戸 信治 |
| 影のなき人も混じりて盆踊 | 岡本 保 |
| 冴え返る生者の居ない自画像展 | ※竹村 半掃 |
| 少しづつ夜を集めて虫時雨 | 佐々木信夫翁 |
| 時々は鶴かも知れぬ妻がいる | みずき 啓 |

【当日一句句会】

来賓作品

尾澤 慧璃 報

神迎え黒船今も沖にいる

羽村美和子

神迎え表と裏が入れ替わる

山戸 則江

配達員出払っている神迎え

なつはづき

さりげなく尻尾を隠し神迎え

山本 敏伴

ここだけの母の愚痴聞く根深汁

藤田 裕哉

遠目にも木立すつきり神迎え

星 由江

紅葉かつ散る遠近の火種の根つこに

石橋いろり

神迎え美談を一つ聞かさるる

三沢 容一

根こそぎや凶事とともに落葉掃く

瀬崎 良介

神迎え忘れ上手は誉め言葉

川島由美子

神迎ええ面打つ里の音高し

霧野萬地郎

出稼ぎが季語なりしころ神迎え

栗林 浩

戻りたる先は過疎村神迎え

川島 浩平

わたくしの根がここにあるピラカンサ

平田 薫

鬱の字を書く勇氣かな神迎え

渡辺 和弘

入賞作品

神奈川県現代俳句協会賞

川島 浩平

神迎ええ紙垂新なり神厩舎

吉田半夏生

初春や吾の根つこは富士の山

増島 光月

戻りたる先は過疎村神迎え

川島 浩平

神迎ええ無神論者の手が痒い

堀場美知子

根を張って天与の神を迎えたる

山下 巖

横浜市長賞

神迎え無神論者の手が痒い

長谷川昭放

神迎ええ美談を一つ聞かさるる

内藤ちよみ

話すほど異国の人か大根抜く

須田 聡子

横浜市会議長賞

根はとても優しいのです親子熊

山下 遊児

大根の白がまぶしい道の駅

石川 夏山

根本は性善説やかまど猫

金栗トモ子

走り根のくすぐる地底蛇眠る

関根 洋子

遠汽笛十一月の根岸線

星野 高士

冬の垣根の小道母校訪う

吉居 珪子

t v k賞

神迎え黒船今も沖にいる

羽村美和子

燈の入りて闇の深まる神迎え

大本 尚

落葉松を映す湖神迎え

岡田 恵子

一人一句

熱爛や男の猪口に本根足す

土屋 良夫

日輪のこがねしろがね神迎え

村山 恭子

へぼ将棋あわてて隠す神迎え

梅津 大八

神迎ええ入口多き一戸建て

及川 幸香

冬の薔薇我の性根の離婚癖

神谷たくみ

根深汁のあつあつが好き母が好き

関戸 信治

ペダル漕ぐ大根のせて児をのせて

宮永 武彦

電線に鳥集まる神迎え

岩田 信

唐破風を濡らす朝日や神迎え

尾澤 慧璃

潮風に磨かれてゆく干大根

岡田 翠風

煤逃や根回しの良き智恵を持ち

北村 文江

眠りつく根も裏方の帰りが花

多久島重宏

大根を抜いて最後の地としたり

安藤 靖

神迎えふ歩行器うまく使い慣れ

山口 愛子

生めかし太大根の転がりぬ

江尻 久子

神迎え音より先に行く機影

尾崎 竹詩

過去形の余白を埋めて神迎え

竹村 半掃

神迎目をそらしたり黒き猫

土屋 健司

おでん取り分け根つからのお人好し

米田 規子

根つからのお人好しです冬うらら

伊藤 梢

少し疲れし開港会館神迎え

たむら 葉

深蒸しの匂いとこのう神迎え

渡辺 テル

神迎ええ紙垂新なり神厩舎

吉田半夏生

中国も熊も加わり神迎え

増島 光月

毛繕ふ鳥も獣も神迎え

杉 美春

走り根に眠りの力深くあり

佐々木重満

靖国よ祖父と逢ふかな神迎え

隴 潤

神迎どの角曲るも未来かな

菅沼とき子

神迎ええ風神雷神ひとつ飛び

里見 美季

根無し草せんだん草よ今日も飛ぶ

小林 詩苑

根深汁今日はなぜだかうまくいく

保里よし枝

マスクの目玉根つからのお人好し

芳賀 陽子

根無し草せんだん草よ今日も飛ぶ

三上 泉

晴れ尽くす根岸子規庵鶏頭花

山田 貴世

神迎ええ丘へんぼんと信号旗

麻生 明

枯木の根まだ生きて燃えている

岡田 典代

神迎ええ丘へんぼんと信号旗

荻野 樹美

諸家近詠(到着順)

小春

加賀田せん翠(無所属)

啓蟄や奥の奥より備蓄米
香水の降りて呼吸が戻りけり
何もかも忘れて歩く小春かな
好きな字を感謝と書いて冬温し

半夏生

中山 妙子(玄鳥)

長くなかく嘘の影ひくおぼろ月
半夏生般若の面のうす笑い
美しい日本を探す渡り鳥
雪もよい不定愁訴は三角形

水の声

富山ゆたか(波)

立春大吉川面は空の青を溶き
梅雨晴やイージス艦は鉛色
新涼や手を触れて聴く水の声
荒海の波の底から冬鷗

街薄暑

青島 哲夫(青岬)

春泥にまみれて戦車無慈悲なる
少女らの臍出しルック街薄暑
野分来て地球の水のあふれだす
暮早しなにか損せし気分なる

時間でず

山下 遊児(波)

ラッパ水仙文句あるなら聞いてやる
噴水の疲れた位置で折り返す
平凡も過ぎれば非凡ラ・フランス
冬木の芽そろそろ起きる時間でず

冬桜

関根 洋子(草樹・天晴)

花吹雪古書肆の奥の鬼女の面
あぢさゐや前頭葉がくらくらす
霧の吊り橋黄泉平坂一丁目
されかうべより一本の冬桜

天窓

小林基子(響焰)

この先を修羅と知りつつ花ぶぶき
XとYの異なる時間梅雨の月
追憶はカノンのように秋の潮
冬銀河けやき大樹の深眠り

転車台

芳賀 陽子(無所属)

春風や一步踏み出す転車台
ほととぎす時の行き交う切通し
秋光や継ぎ目の走る火焰土器
居酒屋の悴んでいるお品書

櫂を漕ぐ

町野 敦子(山河)

つつじつつじ街はたちまち感染症
日曜は百姓となるサングラス
蓮の実の飛んでピタゴラスイッチ
原文へ櫂を漕ぎ出す冬籠

柱

野谷 真治(主流・蛮)

石塊の虚無転がる春雷
急須壊れる西日の食堂
頭ぶつける柱黙込む夜長
ビル解体瘦我慢の寒の入

振花

大佐田うづき(無所属)

カテゴリー五春嵐棲む妻の黙
黒南風のジェラシーと言う雲の影
振花の右や左や人の世や
冬の毛雨趣と知る孤独かな

初燕

比留間加代(蛮)

石庭の勅使門より初燕
島万緑天女の湯浴み始まり
秋風の押ししてくれたる一万歩
不揃ひのぐい呑みそろふ年の暮

青山

田畑ヒロ子(顔)

若葉山抜けきし鐘の音青し
青山に嵌め込んである滝一条
裁ち鉄霜夜の音となりにけり
大根抜く影に力の出ておりぬ

恐竜

佃 悦夫

夏夕べ胸倉股倉こみ上ぐる
恐竜の咆哮閉ぢ夕食とす夏
恐竜と大博打した夏の夕
恐竜に夏の性根揺さぶるる

富岳四景

尾崎 竹詩(無所属)

富士山をぐるりと囲む百千鳥
夏富士を見つけて旅の葉とす
秋風や富士山というすべり台
富士山の稜線が好き冬が好き

こなから

栗林 浩(小熊座)

こなからや炙る程度に目刺し焼く
綿の花君は売られてるいじあな
白い鶏頭みてからなぜか落ち着かず
白菜持つて母があるらし交番に

木の芽晴

藤田 裕哉(蛮)

天ぶらの薄き衣や木の芽晴
クレインの浮かぶ蒼穹大南風
爽籟や鞆の底の四合瓶
竹皮のおにぎりのつや小六月

遠回り 菊地 春美（無所属）

遠回りすれば大樹の遅桜
街角に発見の余地藪茗荷
次々とささやいて来る秋桜
太陽をごくごくくと冬の海

柏餅 日置 正次（玄鳥）

兄妹離ればなれや柏餅
一塊の雲を生んだり立葵
やや高いカフエの腰掛赤い羽根
裸木は人の匂いを伴えり

無題 野木 桃花（あすか）

きさらぎの空は底なし大藁屋
古書漁る初老の背中西日濃し
手を入れてみる新涼の手水鉢
地の微熱小春日和のつつきをり

新しい朝 瀬崎 良介（蛮）

春寒や両手の包む駅珈琲
万緑や獲物窺ふ網ひとつ
爽籟の京間八畳碁石打つ
除夜の鐘独り勤しむスクワット

祭 安藤 靖（暖響）

浅蜷舟墨絵となりし与謝の湾
御輿行き路地のふくれだすタベ
原爆忌雲の湧き方恐れ見る
犯人めく背伸びして見る夜の火車

言霊の野 武良 竜彦（小熊座）

春の野に鳥墜つ地球は迷い星
水無月の言霊借りてものを言う
サテイ流す九月断片化する世界
言葉から刺抜いている枯野かな

無題 小沢 一郎（ロマネコンテイ）

木葉木菟声で浄土をひらきけり
返逆の人生いつも青林檎
天の川アインシュタイン抜き手切る
如月の光に水の動きけり

高麗山 齋藤まり江（波）

高麗山は母の思い出春霞
夕暮れや四葩の花のさらに濃く
秋暑し洗濯ばさみ又折れる
冬落暉坂の向こうの染まりゆく

赤とんぼ 菅沼 葉二（無所属）

先生も授業中断春の虹
旋盤の鉄切る匂ひ夕焼雲
赤とんぼ寂しき肩を知つてをり
小春日や夜の来ること忘れさう

ルール 小野 裕三（海原・豆の木）

おたまじゃくし世界を広くするルール
フランスのありとあらゆる夏の旗
コスモスの向こう小さな野球始まる
兄弟の同じ角度で冬に入る

デジタル 内藤ちよみ（朱夏）

主役にはなれず水つばい春シヨール
デジタルの苦手ばかりが来る端居
台風裡魚の呼吸で寝返りぬ
呼ばれても今ふくろうと迷想中

霜夜 風野 であ（波・小熊座）

立春や真つすぐにする座椅子の背
肩組んで左右に揺れてキャンプの火
終戦日地球を回すブレイキン
きこえそう霜夜の星の金属音

佇まひ 宇佐見輝子（草樹）

白椿落ちて正座の佇まひ
万感の握手は千語梅は実
月天心雲一片も寄せつけず
佃島細身に通す小夜時雨

駱駝の背 内田ゆり子（好日）

梅が香や十歩で渡る長寿橋
星涼し母を乗せたき駱駝の背
胡桃割る平らにありて庭の石
子に似たる巫女と目が合ひ破魔矢受く

瞬季 渡辺 和弘（草樹）

木蓮の一つ一つの空の距離
山中のけものの匂い走り梅雨
国宝の蒔絵の罅や涼新た
地の底の力を感じ北おろし

青く飛ぶ 杉 美春（天晴・小熊座・秋）

薄塩のチップスほどの春愁
刃を入れる小玉西瓜の緯度経度
新涼の指切りさうな新刊本
雲低き日や綿虫の青く飛ぶ

雲の峰 長谷川昭放（顔）

冴返る中古マンション一億円
青春はワンダーフォーゲル雲の峰
反骨の鎌を研ぎおりいぼむしり
十二月メタセコイアに電飾

虚栗 角田 大定（青岬）

渋谷ゆく人は仰がず春満月
南溟の御霊鎮めにゆく西日
寂しくはないといふ嘘虚栗
齢もう忘れし人と日向ぼこ

湘南 加藤 西葱（無所属）

菜の花や富士箱根伊豆相模灘
薫風や湘南清絶地に立ちぬ
金風や江の島のあを潮のあを
浜沿ひに母校競り合ふ三日かな

はみ出し者 酒井 天敏（西丹沢）

ムスカリや鄙には稀な見目形
万緑やはみ出し者のテラフオーミング
孟秋を湯に溶いて飲む癌治療
山頭火口欠け急須爛の酒

途中です 杉山あけみ（無所属）

蒲公英の絮とぶ通信傍受かも
夏つばめひらり尾行の途中です
根拠知りたくて南瓜の蔓たぐる
時雨くる気配砂時計のくびれ

向う 柏柳 明子（炎環・豆の木）

合唱の列の律儀や鳥雲に
玉葱の向うの雨を刻みけり
月光はアダムのあばら骨だらう
天狼へアクセルペダル踏み込みぬ

会員新刊案内

望月英男句集 『塩の道』

伊藤 眠 記

たやすく句集が刊行される昨今において『塩の道』は時代に逆行するかのよう丁寧に凝って編まれた。父上の影響で高校より「あざみ」に投句された著者は、後に「あざみ」誌の編集や横浜俳話会幹事長などを歴任され、本作は長年俳句集団

の重責を担って来られた方ならではの句業の集大成となっている。

まず表紙に驚く。『江戸名所図会』の「鼻欠地蔵」の絵があり、あとがきに句集名とされた由来がある。章立も独特で、第一章は四つ、第二章は七、第三章は六、第四章に七、第五章には八、第六章は三、それぞれサブ章を置く。各ページ三句掲載で一般的な句集二冊分くらいのヴォリュームがあり、作者の深く強いおもいが込められているのが分かる。

睦月まづ妻を労ふ鍋奉行

花八手ゆふべあしたの句読点

陽炎の音又の渦に誘はるる

塩の道武都へひとすぢ涼新た

生涯の句の数如何に土筆生ふ

水澄むやペルリの沖を日が通り

乙字忌の己確かむ無精髭

梅雨寒や工衣に消えぬ油染み

海彦の聲はつらつと初御空

冷まじや木橋数歩を音たてて

無理・無駄のない言葉遣いで情景描写をしつつ、感情を句の奥深くに潜ませ前面には出さない。河野南畦にすっかり学ばれ、俳句への強い情熱と美学が伝わってくる句が並ぶ。そして最終章の「冷まじや」では、家族と共に俳句を続けることの意味が語られ、仕事も家庭生活も疎かにしない実直な俳人の姿を見せる。学ぶことが多い句集である。

『還つて来なかつた兵たちの絶唱』

栗林 浩 著（角川書店）

杉 美春 記

栗林浩さんは戦後八十年の節目に、「戦場から還つて来られなかつた兵士たちの絶唱」にも似た俳

句を読み、当時の状況を再認識したい」「平和維持のために、俳句が大きなことをできるとは思わない。だが、この小さな器が、小さいが故にできることがあるかもしれない」という思いから本書をまとめられた。第一部「還つて来なかつた兵たちの絶唱」では、特攻兵の俳句、平松小いと、井上白文地、長谷川素逝、片山桃史等を取り上げている。心に残った次の二句を私なりに鑑賞したい。

散る桜残る桜も散る桜 奥山道郎大尉（二十六歳）

昭和二十年六月十五日、弟宛の遺書に書かれた特攻兵の絶唱である。散る桜とは特攻兵である自分のこと、この日出撃しなくてもやがては海に散る特攻兵たちの境涯と覚悟を句に託している。

千人針はづして母よ湯が熱き 片山桃史

片山桃史は日野草城の「旗艦」で活躍した若手俳人である。優れた俳句の才を持ちながら出征し、東部ニューギニアで昭和十九年一月に戦死した。享年三十一歳。「母よ」の呼びかけに、祖国の母への思いが溢れている。

第二部では戦犯兵卒の山本北溟子を、第三部では佐藤鬼房ら「みちのくの帰還俳人」を、第四部では厭戦者を虐めた小野蕪子に焦点を当てて論じている。特筆すべきは俳句弾圧事件の黒幕として憎まれ、敗戦後俳句の世界から抹殺された小野蕪子についても、丹念な調査と検証を行って、極めて公正に論じている点である。よく言われることだが、戦争は始まってしまつたら止められない。

「戦後八十年経ち、戦争や俳句弾圧事件を知らない世代の俳人たちに知っておいて欲しい」との願いが込められた論考であり、広く読まれてほしい一書である。

サミット短信

辻堂句会

奥村 純子 報

於・明治市民センター

第三二二回

令和7年9月27日

胸中の深淵に置く曼殊沙華
組板に水すべらせ新豆腐
名月やゆつくりと押す車椅子
新涼や窓開け放つ朝の風
夕焼けを支えきれない崖がある
梨剥くや亡兄がひと切れくれという
秋日傘差し掛ける娘も老いにけり
微熱ある日に秋薔薇の炎となりし
東京のかげはデコボコ秋入日
秋霖や丹沢の峰汀とし
長き夜に南無阿弥陀仏くちずさむ
彼岸花異名の闇や人もまた
今年米混沌の中届きたり
砂時計くびれのこぼす秋の声
蛇笏忌の素水に心うばわるる
一日の元気を貰う百日紅
先立ちし碁仇偲ぶ今年鯊
苦海浄土地持てゆけと栗の毬
慰めは言葉に非ず月鈴子

伊藤 梢
星 由江
渡部 陵子
中村まさえ
藤方さくら
若林つる子
野口美穂子
安藤 靖
岩田 信
樫村 弘子
金栗トモ子
佐々木重満
田畑ヒロ子
土岐 詳恵
長島喜代子
平山 圭子
柳 蒼柳
渡邊 正剛
奥村 純子
令和7年10月25日
平山 圭子
長島喜代子
伊藤 梢
渡部 陵子
安藤 靖
岩田 信
占部美土子
樫村 弘子
金栗トモ子

霧雨や始点終点定まらず

秋刀魚買う太めを選ぶ心意気

わらべ唄きこゆ木の洞秋の暮

秋寒や半袖しまう間もなしに

秋晴や思はず見上ぐ青き空

柿剥けばちちははが来る気配

策にある茸に音感生まれけり

子規庵の杜鵑草詠む歌合

父ヲ喰ウ母喰ウ我ゾ 冬ノ蟹

鈍色の霧包む街みなヘッセ

義理感も失せて冥土か石榴割る

あちこちに金木犀や癒しの香

◎連絡先・・・事務局佐藤久まで

みなとみらい句会

第四二七回

菅原 若水 報

令和七年九月十三日

児の部屋は光の小箱望の夜
とんとんと薬味をきざむ遠火花
究極の直球勝負秋高し
稲光あしたの風を読む卑弥呼
草市の神社に一句手向けたり
白桃を水に浮かべて知る余生
率直な言葉のしみる秋の雨
守宮棲む夫の表札そのままに
木の匂い木綿に残し新豆腐
あっぱっぱ立つも座るもよっこらしよ
いまはむかし直衣の袖や月今宵

田辺かつら
小見 基子
菅原 若水
関根 洋子
田辺かつら
長島喜代子
芳賀 陽子
藤方さくら
町野 敦子
吉村 元明
若林つる子
菅原 若水
里見 美季
小見 基子
菅原 若水
関根 洋子

類杖も余生の仕草赤とんぼ

浮世絵の目力つよしいぼむしり

戦なき戦後を生きて敬老日

余白にも言分ありて遺書を書く

浮世絵のペロ藍出づる秋の蝶

親友と共に八十路の新酒かな

稲つるび渦中の男浮き彫りに

色変えぬ松ともどもの天守閣

第四二九回

令和七年十一月一日

類杖も余生の仕草赤とんぼ
浮世絵の目力つよしいぼむしり
戦なき戦後を生きて敬老日
余白にも言分ありて遺書を書く
浮世絵のペロ藍出づる秋の蝶
親友と共に八十路の新酒かな
稲つるび渦中の男浮き彫りに
色変えぬ松ともどもの天守閣
ハロウインいちにち魔女になりすます
山映す窓を燃やして夕紅葉
百舌鳥の贅政治私物化するなけれ
短日や昨日のことは忘れ去り
いい人で終える人生温め酒
米騒動知らぬ田んぼの案山子かな
焼芋や大器晩成八十路なり
お誘ひに乗つてみやうか後の月
◎連絡先 菅原若水 s-shinyas@st.dion.ne.jp
までご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」をお送りいたします。

長島喜代子
芳賀 陽子
藤方さくら
細貝 昭吾
町野 敦子
三沢 容一
吉村 元明
若林つる子
菅原 若水
里見 美季
菅原 若水
関根 洋子
田辺かつら
藤方さくら
細貝 昭吾
三沢 容一
吉村 元明
麻生 明
大塚 真紀
桐山 芽ぐ
栗原嘉一郎
里見 美季
菅原 若水
藤原真理子
原田由紀子
長島喜代子
町野 敦子

星川句会

九月

金栗トモ子 報

向日葵の凝視戦車が動き出す
古き本古きレコード法師蟬
踏切が高架に変わり猫じやらし
日焼けして米寿祝いの露天風呂
いなびかり一行もどるサスペンス
米粒は歓喜の涙稲を刈る
二期期や子供の数の英和辞書
ぜいたくな暗闇を見る流れ星
読むべきは読んでひとりの茄子を焼く
次々と案山子生まれる家族の和

麻生 明
大塚 真紀
桐山 芽ぐ
栗原嘉一郎
里見 美季
菅原 若水
藤原真理子
原田由紀子
長島喜代子
町野 敦子

わら塚の陽のぬくもりや陽の香り
餓死という戦死の数多敗戦忌

横山 幸子
金栗トモ子

蔵書千す父の背中に飛蝗のる
九十という敬老の日の平泳ぎ
新涼や白地の軽い博多帯
虫の音を掬い置きたし枕もと
るんるんの余生のはずの病める秋
新米を研ぐ雨音を聞く厨

甲斐 泰子
加賀田せん翠
川島由美子
齋藤佳代子

落葉踏んでふと永遠の声を聞く
マラソンの合羽擦れ合う音寒し
無駄のない暮し窮屈ななかまど
立冬や片足立ちを一分間
冬ざるるせめて人生ゲームで勝つ
紙芝居駄菓子並ぶや小春空
駄菓子屋の外れくじ無し小春かな
サンタ役決定園長室の駄菓子
貸し下駄は雪に二の字の跡消され
冬用意身長またも縮みたる
幸せのあふるる一日七五三
鱒酒を飲みたしと駄駄こねてみる
子供らに鳥居は高し七五三
飾られて迷惑そうな七五三

麻生 明
安藤 均
植田いく子
加賀田せん翠
齋藤佳代子
佐伯 悦子
佐藤 鈴代
佐藤 廣枝
菅原 若水
関戸 信治
中原なおみ
花澤ちいこ
三沢 容一
吉居 瑠子

十月

ソファーにひとつ草の実の氏素性
歳時記は父の形見や十三夜
返信は豊かなる風今年米
杖をつく足どり未熟秋日和
札状のペンちよつと置くつづれさせ
野分跡暗示のごとく物置かれ
洪抜きの手順不確か貰い柿
曼珠沙華あの世この世のど真ん中
歩いて歩いて余生楽しむ紅葉狩
p.c.を置けば仕事場花野風
流れ星グローブはめて待っている
友逝きて置いてきぼりの証叩

麻生 明
大塚 真紀
桐山 芽ぐ
栗原嘉一郎
里見 美季
菅原 若水
藤原真理子
原田由紀子
長島喜代子
町野 敦子
横山 幸子
金栗トモ子

新走うまさ広がる江戸切子
シーソーの相手がいない初紅葉
夢の地へ始発電車や秋の旅
萩こぼる実感のなき平均値
青蜜柑爪の中まで香りたつ
ふつくらと秋刀魚にもある八頭身
ワクチンの帰りが栗踏みにけり
日と影と色ぬり分けて式部の実
黄昏に揺れてつぶやく曼珠沙華
口実は無駄と呟く月明かり
水上に木の実時雨の予報あり
実務経験無用のチラシ蜜柑むく
八十年の平和かみしめ秋刀魚焼く
実はねと切り出す話銀木屋
お隣りと長話する秋日和
ほかほかとこれも料理か衣被ぎ
決断はまたも見送る柚子絞る

青島 哲夫
麻生 明
安藤 均
植田いく子
甲斐 泰子
加賀田せん翠
齋藤佳代子
佐藤 鈴代
佐藤 廣枝
佐伯 悦子
白井千代子
菅原 若水
関戸 信治
花澤ちいこ
三沢 容一
吉居 瑠子
山田ひかる
十月 令和7年10月18日(土)

湘南サンシャイン句会
十月 於・藤沢市役所本庁舎5階会議室
八十路にも熱き心や石榴の実
大かぼすぎゆつと絞りてしかめ面
桜紅葉この方向で合ってます
昼の虫ひとりゆつくり爪を切る
幕切れをあれこれ想う曼珠沙華
颱風・多足ノ神ヲ ヒトリ占メ
切札は背に負う十字案山子翔ぶ
散髪ダイアムの耳の明かるさ天高し
言動の危つかしい秋風鈴
知らぬ人の電話出ませんゐのこづち
亡き母を映す手鏡赤のまま
裁ち鉄秋の青空切りとりぬ
白桔梗あなたの声を忘れそう
端切良く裾蹴り上げて阿波踊
火の国や沸き立つものは赤とんぼ
結界へ伸びる白萩切り揃へ

堀口みゆき報
令和七年十月三日(金)
青木 敏行
青柳 白芳
安藤久美子
荻野 樹美
金栗トモ子
芳賀 陽子
日置 正次
保里よし枝
馬来まち子
みほ はな
室伏くるみ
山口 愛子
吉田半夏生
渡辺 正剛
堀口みゆき

コスモスの顔認証をしたくなる
ジェットコースター悲鳴の果ての天高し
ドラフトに悲喜おしよせる居待月
蝨スヒトだけが持つエゴイズム
整列の子らに紅葉の散りかかる
亡き人の影をまといて秋遍路
霧の夜は霧にまかせて髪を梳く
銀杏落葉矩形の街を御者のゆく
富士山を背負いてタフな吾亦紅
顔中の皺を友とし猿酒
◎連絡先・・・事務局佐藤久まで

麻生 明
桐山 芽ぐ
栗原嘉一郎
菅原 若水
藤原真理子
原田由紀子
長島喜代子
町野 敦子
横山 幸子
金栗トモ子

十一月
新走うまさ広がる江戸切子
シーソーの相手がいない初紅葉
夢の地へ始発電車や秋の旅
萩こぼる実感のなき平均値
青蜜柑爪の中まで香りたつ
ふつくらと秋刀魚にもある八頭身
ワクチンの帰りが栗踏みにけり
日と影と色ぬり分けて式部の実
黄昏に揺れてつぶやく曼珠沙華
口実は無駄と呟く月明かり
水上に木の実時雨の予報あり
実務経験無用のチラシ蜜柑むく
八十年の平和かみしめ秋刀魚焼く
実はねと切り出す話銀木屋
お隣りと長話する秋日和
ほかほかとこれも料理か衣被ぎ
決断はまたも見送る柚子絞る

青島 哲夫
麻生 明
安藤 均
植田いく子
甲斐 泰子
加賀田せん翠
齋藤佳代子
佐藤 鈴代
佐藤 廣枝
佐伯 悦子
白井千代子
菅原 若水
関戸 信治
花澤ちいこ
三沢 容一
吉居 瑠子
山田ひかる
十月 令和7年10月18日(土)

湘南サンシャイン句会
十月 於・藤沢市役所本庁舎5階会議室
八十路にも熱き心や石榴の実
大かぼすぎゆつと絞りてしかめ面
桜紅葉この方向で合ってます
昼の虫ひとりゆつくり爪を切る
幕切れをあれこれ想う曼珠沙華
颱風・多足ノ神ヲ ヒトリ占メ
切札は背に負う十字案山子翔ぶ
散髪ダイアムの耳の明かるさ天高し
言動の危つかしい秋風鈴
知らぬ人の電話出ませんゐのこづち
亡き母を映す手鏡赤のまま
裁ち鉄秋の青空切りとりぬ
白桔梗あなたの声を忘れそう
端切良く裾蹴り上げて阿波踊
火の国や沸き立つものは赤とんぼ
結界へ伸びる白萩切り揃へ

堀口みゆき報
令和七年十月三日(金)
青木 敏行
青柳 白芳
安藤久美子
荻野 樹美
金栗トモ子
芳賀 陽子
日置 正次
保里よし枝
馬来まち子
みほ はな
室伏くるみ
山口 愛子
吉田半夏生
渡辺 正剛
堀口みゆき

川崎句会

山田ひかる 報

於・川崎市総合自治会館
令和7年9月20日(土)

九月

マンモスの生きし証や野分雲
老いてなほ花丸もらふ日々草
黒葡萄安全地帯なき地球

青島 哲夫
安藤 均
植田いく子

十一月 令和7年11月15日(土)
注射針まささぐる痛さ年の暮

青島 哲夫

結界へ伸びる白萩切り揃へ

堀口みゆき

十一月

11月7日(金)

於・藤沢市民活動推進センター二階会議室

併走の電車の窓に秋の顔

青木 敏行

草の実のはじけて飛ぶや風まかせ

青柳 白芳

それぞれの精一杯が紅葉です

安藤久美子

ハロウインの魔女に扮して踊りけり

荻野 樹美

薄情と多情の同居西鶴忌

金栗トモ子

オーロラニ 巻キコマレユク 緋ノマフラー

塵

面影のうすれつつあり夜這星

芳賀 陽子

抜きん出たひとりぼっちの青芒

日置 正次

文字でなく声が聞きたい冬の蝶

保里よし枝

靴下を繕ひてをりもずの声

馬來まち子

嘔み癖のあるフアスナーや穴惑

みほ はな

オリオンのもとで百回縄跳びす

室伏くるみ

運動会あの泣き虫のぶつちぎり

山口 愛子

星流る変換ミスしたやうに

山下 遊児

たましいを満タンにして鳥渡る

吉田半夏生

世の中が変はる泡立草の黄に

堀口みゆき

◎連絡先 堀口みゆき

myuhoriguchi@yahoo.co.jp

電話 090 3914 0568

インターネット句会

宮永 武彦 報

八月

枝先の触るる水面や白き秋

吉村 元明

八月の水辺に拾う詩の欠片

町野 敦子

スカートをちよつとつままで秋を跨ぐ

平田 薫

夏草や売られてゆくかこの畑も

佐々木重満

そこだけが動きだすかに水着跡

江原 文

新涼や富士の溢れる伏流水

光田久美子

初盆や居心地を訊く施餓鬼棚

木下 研作

昭和のテンポ我にしつくり百日紅

桐山 芽ぐ

終戦日空見る祖父の寡黙かな

るう

水巡る星よ人新世に炎ゆ

岩田 六川

喜雨の夕田水たたいて蛙鳴く

柳 蒼柳

ブーゲンビリアの隙間より青い空

遠藤 美緒

吸うて吐く呼吸忘れず秋の風

菅原 若水

安眠や蘭草の香吐く莫産を買ふ

多久島重宏

秋の色バクに食べさす夢がない

石川 夏山

白南風や知覧に残る兵の文

金栗トモ子

老いてなほクリームソーダに夢ごこち

須藤 節子

身籠りし妻に夫の日傘かな

瀬古 修治

泥鰯いづこ八十年前我が食ひし

石鎚 優

人間の止まぬドンパチ海月浮く

麻生 明

水澄むや仔犬の瞳まんまるく

宮永 武彦

九月

ランナーの靴底高く秋の空

るう

遍路来て茜の駅に風と坐す

佐々木重満

ロボットを話し相手に愁思かな

金栗トモ子

長生きの少し悲しき栗ごはん

江原 文

鯉跳んでがしゃんと海がとびあがる

平田 薫

蜻蛉のひとり遊びや水たまり

瀬古 修治

ふたたびは還らぬ時間今日の月

菅原 若水

ともあれ晩年となりし夜の秋

岩田 六川

彼岸花暦通りに頭出し

多久島重宏

きみというやさしい時間きのこ山

遠藤 美緒

横浜の月に残暑の地球の影

麻生 明

平凡な一日が大事稲の花

町野 敦子

炎暑日や娘も小傘親子連れ

桐山 芽ぐ

はらからはみなそろひしやねこじゃらし

木下 研作

龍淵に潜む終戦合意せよ

石鎚 優

無秩序の地球の秩序野分来る

須藤 節子

紅葉して日の斑ちらちら丸くなる

石川 夏山

天地無用白桃けさの宅配便

渡辺 順子

前線のお気の召すま秋荒天

吉村 元明

大山へ豊かな車窓栗ごはん

柳 蒼柳

十月

児らの踏む落葉は児らの音たてて

江原 文

満月を眺め身体初期化する

金栗トモ子

からつぽの時間つくり秋の海

遠藤 美緒

蜻蛉のニアミスごっこして去りぬ

桐山 芽ぐ

とても遠い日があつた数蘭のむらさき

平田 薫

どぶろくや孤独の輪郭ぼやけ出す

佐々木重満

温め酒寡黙な友の吐く本音

瀬古 修治

もみじ葉の一滴落ちて大河なす

多久島重宏

秋冷や書棚の隅に星座表

町野 敦子

新酒汲み遺言だけは書いておく

須藤 節子

ひげもじやの婆もゐませり曼珠沙華

石鎚 優

七転び八転びの果て燗焼く

菅原 若水

ずっしりと稲架のたわみや里の風

木下 研作

細りゆく渴筆の雲 木守柿

吉村 元明

ヨコハマの地球のはずれで燗の酒

石川 夏山

バイク手放しなんだかな雪迎え

岩田 六川

今年米年の順よりよそいけり

光田久美子

名月や佇むための勝手口

麻生 明

匂い立つ頭上の音や松手入れ

るう

水音の豊かと思ふ秋彼岸

宮永 武彦

◎どなたでも。参加者募集中。登録・参加は無料。

(初回参加はアカウント作成が必要ですので、お問合せください)

連絡先 宮永武彦 takehikom0410@gmail.com

磯子凧句会

尾澤 慧璃 報

九月

於横浜市社会教育コーナー

令和7年9月24日

最下位の運勢欄や木の実落つ

川野ちくさ

湘南の海を見てゐる案山子かな

鹿又 英一

秋麗や運河見下ろすエアキャビン

尾澤 慧璃

油浮く運河の漁船月明り

瀬崎 良介

雲梯の一段飛ばし秋の天

佐藤 久

畑から田から人消え運動会

辻内美枝子

秋深し薩摩切子の紅の色

長濱 藤樹

赤とんぼ炭酸の泡上りたる

村上 裕也

秋空や杉の香運ぶ大リング

木下 研作

足運びよろしき歩荷草紅葉

桐 まり花

禅寺の悟りの窓や初紅葉

岩田 六川

椅子運ぶ生徒の声や罌雲

藤田 ゆい

秋天や婚礼家具の運ばるる

池田恵美子

六甲を駆け下りてゆく秋時雨

猪岡 義弘

◎会場 横浜市社会教育コーナー研修室C

(JR磯子駅より徒歩4分)

◎日時 奇数月の第4水曜日 13時

◎連絡先 尾澤慧璃 KingLoveSreac@gmail.com

金八句会

九月

橋裏の水のさゆらぎ船遊び

松浦 泰子

秋暑し便りに雪の切手貼る

栗林 浩

初秋や線香の香をかえてをり

神谷 順子

いつかまたどこかであそぼねこじやらし

石鎚 優

秋の老輩揃うてスクワット

扇 義人

えのころの墓域に尽きて風ばかり

里見 美季

どんぐりや箱は時間を閉じ込めて

なつはづき

失恋に似てゐるだけの割柘榴

佐藤 久

しばらくは胸に抱きて今年米

中村 光男

里山のひぐらし背なの墓参かな

村上 裕也

靴紐の固き結び目夜の秋

杉 美春

十月

急逝の友は町医者罌雲

中村 光男

秋うららかにかけ惚け鳴きにける

栗林 浩

若き日の父の禪や白芙蓉

石鎚 優

秋深し清めの川に手を浸す

松浦 泰子

秋の宵大屋根リングの万華鏡

扇 義人

唐辛子まけないちから実りけり

神谷 純子

秋夕焼ふつとバッグの持ち重り

里見 美季

ごつた煮の五色の匂ひ秋の暮

杉 美春

コマ送りのモノクロ映画文化の日

尾澤 慧璃

頑迷の馬鈴薯茹でていてゐる

佐藤 久

十一月

長き夜の羊の列の長きこと

栗林 浩

無花果を割ればひろがる宇宙かな

中村 光男

秋惜しむキヤリーバックの音高し

村上 裕也

夕しぐれ詩を書く鉛筆たちは森

なつはづき

太陽の近づいてくる鳥瓜

佐藤 久

園のバスここに止まるよ冬菫

神谷 純子

シヨベルカーのアームで掬ふ芋煮会

扇 義人

望郷や鉢植ゑの撫黄葉す

石鎚 優

乗車位置なほす列車やそぞろ寒

尾澤 慧璃

切れば柿の断面子規の横顔

里見 美季

ひつぢ田の深き足跡雨催ひ

松浦 泰子

◎毎月第二金曜日 夜八時より。ZOOM使用。

第二水曜日出句締切、事前投句

◎連絡先 杉美春 niharusugi@jcom.home.ne.jp

丹沢句会

竹村 半掃 報

九月

パリ黄昏て焼栗売りのアラブ人

澁谷 徹

混沌の世界情勢霧縷

岡本 保

俗ありて洒脱ちろに深き闇

菅沼 とき子

夢醒めてカフカの長い蜚蠊の髭

尾崎 竹詩

黄昏の自販機に立つ愁思

佐々木重満

境内は大地の鏡萩の寺

加藤 三眼

寿限無寿限無何ンタ何ダトバツタ跳ブ

與 起

もう少し出回るを待ち栗の飯

加藤かほる

福耳の右は耳鳴り左はちちろ

長谷川昭放

高原の風の手ざわり桐一葉

北村 文江

大花野風になりきるまで歩く

篠崎 妙子

満月を犯す犯人黒い星

杉本 秦空

おーいなつのわすれものだぞあおぞらに

羽田 勝二

風吹いて空青くなる葉鶏頭

三橋 伸子

十一月

木守柿鳥の名前が出て来ない

加藤 三眼

リメイクの犬の座布団冬ぬくし

立石 采佳

はらはらす熊住まわせる球の黙

加藤かほる

百態の裸木百の飛び六方

菅沼とき子

眠られぬ獣残して山眠る

星 一義

躰いて振り向く石に霜の声

田畑ヒロ子

オーロラの化学反応冬が来る

北村 文江

枯葉道シナプスの声響きけり

佐々木重満

裏金の汚れを余所に水澄めり

長谷川昭放

初霜や野良の土踏み朝清し

杉本 秦空

生命線少しゆるめて日向ぼこ

篠崎 妙子

かきねこしまつかなかきをひとつもぎ

羽田 勝二

朝迎ふ脳内空に冬ぬくし

三橋 伸子

どんぐりの小さき裸身池の底

須田 聡子

魂の表面張力 はせをの忌

竹村 半掃

◎連絡先：長谷川昭放

080・5013・6618

Kumonomine100ku@mk.scn-net.ne.jp

渡邊正剛氏 つるかめインタビュー

現俳ウエブ12月号で大公開中

現代俳句協会広報部の企画で、全国のご長寿会員のご活躍を取り上げています。神奈川県を代表して渡邊正剛さんにご登場願いました。ぜひご覧下さい。

https://gendaihaiku.gr.jp/page-18285/



吟行しようよ (第四回)

「時宗総本山 遊行寺」

山下 遊児

藤沢市の古刹、遊行寺(ゆぎようじ)は東海道の日本橋から数えて6番目の宿場町にある時宗の総本山である。開祖は俳人黒田杏子が惚れ込んだと言ふ一遍上人。寺門は特徴のある冠木門(かぶきもん)で全体が黒く塗られているので黒門とよばれている。その黒門をくぐると「いろは坂」へと続く、四十八段あると言われているが私は数えた事がない。左右に植えられた八重桜のトンネルを抜けると一際目立つ大樹が見えて来る、樹齢650〜700年と推定される銀杏の御神木である。黄葉の時期は浄土に來たかのような感動を受けるのでお勧めである。

本堂の正面に向かって右側に一遍上人の像を伺う事ができる。黒田杏子の句「稲光一遍上人徒跣」を彷彿とさせる御姿である。

さて本堂の左側に足を進めると植え込みの中に私の所属する波俳句会の初代主宰の青木泰夫の句碑が見える。「戦後遠し働く蟻と迷ふ蟻」早く亡くなられたので警咳に接した事は無いが酒豪であったと聞いているので親しい気持ちになる。この句碑の横に見えるのが「放生池」だ。徳川幕府が金魚銀魚を放生するならばこの池へと勧めた由緒ある池である。池の先の細い道を進んで行くと小さな祠が見えて来るが「宇賀弁財天」だ。祠の後ろの山からは水が流れていて、その水で銭を洗うと開運すると言われている。さてさて隠れた名所を一つ紹介しよう。説経節で有名な小栗判官と照手姫の物語に関係する「小栗堂」である。私は裏庭

にある水琴窟を時々清掃しては妙音を聞かせて頂いている。

句会場としては遊行寺の入り口近くにある藤沢宿交流館がお勧めである。(定員13名で2時間100円。予約は3カ月前でコピー機も有り)尚、この遊行寺では毎年秋になると一遍上人忌俳句大会が開催されているので是非とも参加を!



遊行寺本堂



遊行寺冠木門

丹沢句会吟行会報告

長谷川昭放 記

日時 令和七年十月十七日(金)

吟行地 国府津海岸(相模湾)と菅原神社

句会場 国府津駅自転車駐車場会議室

講演 「不易流行論」

講師 神奈川県現代俳句協会名誉会長

尾崎竹詩氏

当日は絶好の吟行会日和の秋晴であった。駅頭に二人の案内人がおり地図を配っていた。句会場と吟行地までの所要所には墨痕鮮やかな道案内の貼紙がある、用意周到ぶりであった。参加者は総勢37名、海を見に行く者、神社を先に行く者、思い思いの場所へ歩を進めた。

句会は菅沼とき子の開会挨拶に続き、芳賀陽子会長、内藤ちよみ副会長、佐藤久事務局長の挨拶を戴きスタート。

講演は尾崎竹詩氏のプロフィールが紹介された後、「奥の細道」を中心としたレジュメに基づき時には脱線のユーモアを交えた、熱弁であった。時には「芭蕉隠密説は本当か?」「同行者、河合曾良の役割は」「湯殿山(神社)の御神体を見た人は?」二人の手が挙がった。等の活発な質問や遣り取りがあり楽しく有意義な講演であった。

その後、清記用紙が配られ会場は静かな緊張感に包まれた。披講は菅沼とき子、北村文江、選評は前述の県本部三人と尾崎名誉会長であった。御待ち兼ねの成績発表は田畑ヒロ子よりあり、表彰式が行われた。閉会の挨拶は加藤かほるが名残惜しそに行なった。

懇親会も予約を上回る21名が出席、大いに盛り上がり、あっと云う間の二時間であった。



尾崎竹詩講師と会場風景

一位から十五位までの入賞句と作者
 秋天を太平洋へ釣り落とす
 何はともあれ撫で牛を撫でる秋
 鳶旋回すれば秋光メビウスに
 釣糸を巻く秋潮に身を反らせ
 秋澄めり国道一号湾曲す
 一人来て浜の秋思を拾いけり

山下 遊児
 伊藤 梢
 杉 美春
 岡田 翠風
 長谷川昭放
 尾崎 竹詩

バツタと目が合ってしまったもう跳ぶしかない
 杉山あけみ
 神木の割れ目愛しい虫の秋
 星 由江
 竹の春撫で牛の抱く米俵
 佐藤 久
 一湾の青さを広げ帰燕かな
 北村 文江
 キヤラメルの空箱ひとつ秋の海
 荒 理依子
 路地のみな浜へ向かひて花すすき
 岡本 保
 潮騒の無縁仏や秋の蝶
 澁谷 徹
 波という襞織っている浜の秋
 平山 圭子
 秋の風天満宮を通りゃんせ
 土岐 詳恵

冬の一句



撮影：里見美季

飴切りの音も絶えたり小夜しぐれ
 猪狩 鳳保
 初御空二度寝してをりけふも又
 青島 哲夫
 寒の頬ひとつたたい立ち上がる
 中山 妙子
 枯蟪螂今は昔の武勇伝
 横川はっこう
 片手袋失くした場所へ帰れない
 宮永 武彦
 すずなりの実南天の赤初キンス
 石鎚 優
 幻想の広がる恋や御神渡り
 金栗トモ子

II 地区動向・消息 II

1. 10月17日(金) 丹沢句会吟行会 37名参加
 国府津駅周辺/於自転車駐車場会議室
2. 11月23日(日)
 令和七年度神奈川県現代俳句協会俳句大会
 かながわ県民センター 85名参加
3. 11月27日(金) 副会長会議
 次年度活動計画、組織案、他
4. 11月27日(金) 大会反省会

発行所 神奈川県現代俳句協会
 発行人 芳賀 陽子
 編集人 杉 美春
 〒252・0325
 相模原市南区新磯野4-4-1-506
 電話 090・6534・1452
 Eメール miharusugi@jcom.home.ne.jp
 事務局 佐藤 久
 電話 090・6587・0113
 Eメール hisashi36@fj9.so-net.ne.jp
 印刷所 (有)湘南グッド

5. 12月5日(金) 湘南サンシャイン句会吟行会
 50名参加 藤沢市内/ル・クラシック
 6. 12月8日(月) 三役顧問会議
 今年度事業報告、次年度活動計画、組織案
 7. 新会員《正会員》
 小助川駒介(鎌倉市) 増島光月(横浜市)
 新会員《会友》
 田中知宏(横浜市) 原田由紀子(横浜市)
 青柳白芳(茅ヶ崎市) 北爪鳥閑(大和市)
 渡部陵子(大磯町) 土屋良夫(座間市)
 8. 会員動静
 大槻小葉(住所変更) 横浜市
 9. 逝去謹悼
 野谷真治(二ノ宮町) 令和七年十一月
- 《編集後記》
 ○令和七年度俳句大会も盛況のうちに終了しました。事前投句と当日一句句会の入選句を掲載しました。入賞者の皆様、おめでとうございます。
 ○会報171号では、「春の一句」を募集します。編集人までご投句ください。2月20日締切です。
 ○どうぞ皆様、良いお年をお迎えください。